

2006年訪問活動概略

※2004年中途からは、訪問活動の記録をまとめたものを従来通りの形で公表しなくなったため、参考として、毎回の訪問活動の案内に掲載している、前の回の訪問活動の内容の概略を集めました。

1月14日

(記録なし)

1月28日

(記録なし)

2月11日

- ・60代女性。震災から11年目で初めて人に話す、と言われる悲痛なお話を伺う。地震による家族の生活の変化に心を痛め「こうして今日初めて人に話してどれだけこの辺が楽になったか」と、おなかと胸を押さえられる姿に、胸も塞がれる思いであった。
- ・80代女性。ドーンと音がして、電気が消えた。震災に戦災の思いを重ねて語り、この場所に当ってよかった、と現在の幸せを語る1時間に、聞く側も幸せな気分。
- ・70代女性。梁の下敷きとなったご主人を失う。あつという間だった、と言われ、おだやかに現在をお話しいただいた。お元気で、と心を残して辞す。
- ・70代女性。戦争の時、特攻隊を手を振って見送ったことを思い出す。お孫さんがボランティアで頑張った。ボランティアは役に立つ。本人が真っ直ぐに生きる助けになる、と言われた。

2月25日

- ・70代女性。ご主人が亡くなられてから、だまされやすくなっている。お伺いすれば、相当高価なものをだまされて購入されている。
- ・60代女性。1時間で家が丸焼け。何も取り出せなかった。透析の病院を自分で探して通った。淡々としたお話しの中に、乗り越えられてきた凄さをヒシと感じた。
- ・60代女性。この地で生まれてこの地で育ったが、知り合いも散り散りになり居らず、母も仮設で認知症で亡くし、障害で身体は80代と、長時間のお話を伺う。
- ・80代女性。階段から火が上がってきて足がすくんで動けなかった。全部燃えて、その後のことはよく覚えていない。ご主人が2年後に亡くなられた。病気でなく疲れで、と言われる。一度も夫婦喧嘩をしたこともないご主人に、今も写真を見ながら話し掛けておられる由。今日は話しが出来てよかった。夜、ぐっすりですよ、と言っていた。

3月11日

(記録なし)

3月25日

- ・ 60代女性。重度身障の子どもと被災。着るものも履くものもなかった。夫も仕事を辞めて2人で子どもを守る。こども自殺者が多い。仮設からの名簿でも、多くの方が亡くなっている。
- ・ 80代ご夫妻。震災以来子どもも家族も情緒が不安定。ご苦労をしたたかに何う。専門家の介入も必要かと課題を残す。震災の底知れない後遺症の大きさととまどう。
- ・ 70代女性。視力障害の中での被災体験を何う。声を掛け合った震災前の住居から被災後の仮住まいと仮設生活。今は近所づきあいが無い復興住宅で「マッチ箱に入ったマッチ棒のよう」とみずからを表現される、知性あるチャレンジに励まされるお話を何う。
- ・ 80代ご夫妻。高齢者の保険料値上げ、家賃値上げ、年間医療費は25万円。電気自動車の補助打ち切り。地震を生き抜いた透析のお嬢さんも亡くなり、ご夫婦もガン手術。波乱の現状。

4月8日

- ・ 70代家族。全壊、子どもは家の下敷きになり意識がないまま一家は郊外へ避難した。親の健康など全てのことが心配。が、多くの方々にかけていただいたご恩は絶対忘れない。
- ・ 50代友人。アパート全壊の身体が不自由な友人を助けて、公園テントへ、避難所へ、仮設住宅へ、様々なアイデアを活用して尽した草の根ボランティアの実話を何う。
- ・ 60代女性。全壊の家で家具に当り気絶。子どもは無事。大阪へ避難したが子どもの障害もあり神戸に帰ったが苦労した。筆舌に尽くせぬご苦労の現実を、驚きをもってお聞きした約2時間。

4月22日

(記録なし)

5月13日

- ・ 80代女性。震災のあと、ご主人の性格がすっかり変わってしまい、引きこもりの子どもとDVのご主人とともに頑張るご様子を聞く。
- ・ 70代女性。視力が不自由のまま震災を切り抜ける。借家住まいと仮設住宅のあとここへきたが、新しい生活が始まると期待していたが失望。「マッチ箱に入ったマッチ棒」と自称される。
- ・ 60代女性。震災の直前にながく患われた父を亡くし、震災の4年後に母を亡くされた。島の先端の仮設住宅で、生活の工夫くり返し。戸口でお話を何う。

5月27日

- ・ 20代男性。地震の前日ネズミがいなくなった。ゴキブリやネズミがいるのは安全とのこと。
- ・ 70代ご夫妻、子どもと3人。子どもが下敷きになり意識不明であった。親の健康のことなど考えると全てに心配。多くの方にかけていただいたご恩は絶対忘れず、明るく前向きに頑張ると。
- ・ 50代男性。身体が不自由なご友人の面倒を見られている。避難所では障害者は生活できず、やむなく公園にテントで1年。仮設でも工夫を凝らし生活援助。災害時は、周りにやさしい人がいることが大切と、ほっとけない性格の、すがすがしいお話を何う。
- ・ 60代女性、子どもと2人。障害児と共に被災と避難と障害進行と闘う日々。この住宅へ来て

思いもかけなかった新しい苦しみに出会い、人を避けて暮らす。運動不足と心臓への負担が問題。

・80代男性、3人暮らし。借家が燃えて学校に避難。腰が曲がり、立っておしゃべりも辛そう。若いころの造船と重工での仕事を語り、男のロマンと仕事愛を感じさせられた。

6月10日

(記録なし)

6月24日

(記録なし)

7月8日

(記録なし)

7月22日

(記録なし)

8月12日

(記録なし)

8月26日

(記録なし)

9月9日

(記録なし)

9月23日

(記録なし)

10月14日

(記録なし)

10月28日

・60代男性、爆弾のような音で目が覚めた。1階へ部屋ごと落ちたが無事だった。見知らぬ母子が羽毛のジャンパーをくれ、寒いので助かった、名前がまだわからない。部屋を趣味でいっぱい飾られ、人並み以上のご苦勞をしのぐ。人間「アカンと思ったらアカン」と言われた。

・60代女性、灘区で全壊。パニックに近所で声を掛け合った。引越し4回でここへきた。扉は開いていることが大事。閉じこもった人は死んだと同じだ。来た人と話しするだけでよい。ボランティアには世話になった。「たけしま・さよ」さんに会いたい、と言われる近所のお世話役。

11月11日

・80代男性、一人暮らし。3年前に奥様をガンで亡くす。奥様は震災後無理をされておりしんどいしんどいと言っていた。地震のあと1週間ぐらひはみんな痴呆状態だったと言われる。インターネットも始め、お一人になった頑張りも感じられた。

・60代女性、ご主人と2人暮らし。ご主人は2年前からガンで臥せっておられる。後遺症があり夜中も家中の電気をつけっぱなし。仮設住宅がよかった、忘れられない。和歌山の単車の若者は母に弁当を置いていてくれた、と涙で言葉を詰まらせる。7回の引越しやご主人のご病気。「ご苦労」は自分のもって生まれたもの、と語り尽くせない1時間のお話し伺い。

11月25日

(記録なし)

12月9日

・70代男性。家族3人暮らし。週末ボランティアの西区の仮設住宅訪問のことも知っている。あちこちから受けた支援は忘れられない。それだけでなくお返しをしたい。固くなっている初参加の青年などみんな、温かいお部屋で1時間半のお話し伺い。

・60代男性、一人暮らし。奥様を亡くされ、アルコール依存となる。忘れようと飲むと余計に思い出すんですよと、声を震わされる。一人言うたら孤独で、ホンマにつらいです。これ以上言うのは恥じになるばかり、帰ってください、と。約1時間の訪問を、黙して辞す。

12月23日

(記録なし)